

平成28年度社会教育・公民館等職員研修会Ⅱ

日時：平成28年8月24日（水）10:00～15:45

会場：県行政庁舎 講堂

〔ねらい〕

社会教育・公民館等職員の仕事と役割についての講話を聞いたり、職員の実践の様子や課題解決へ向けての取組を聞いたりして、自身の課題の再認識とその解決方法を考える。また、東日本大震災からの復興へ向けた取組から、地域再生・再構築へ向けた社会教育の取組を考える機会とする。

【社会教育・公民館等職員 初中級者向け研修シリーズ②】

〔参加者〕

市町村等教育委員会職員、公民館等社会教育関連施設職員、社会教育主事等社会教育関係職員
73名

〔内 容〕

午前：（1）説明「研修会のねらい」（年間講師から）

（2）講話・グループワーク・シンポジウム「社会教育・公民館等職員の仕事と役割」

講師・コーディネーター：東北大学 准教授 石井山 竜平 氏

シンポジスト：大崎市西古川地区公民館 館長 佐々木 孝嘉 氏

仙台市広瀬市民センター 主任 澁谷 まゆみ 氏

白石市教育委員会生涯学習課 社会教育主事 松本 志畝 氏

〃 主査 佐々木 さつき 氏

午後：シンポジウム・グループワーク

「東日本大震災の経験から社会教育の未来を考える」

コーディネーター：東北大学 准教授 石井山 竜平 氏

シンポジスト：NPO法人ウィメンズアイ 代表理事 石本 めぐみ 氏

せんだい3.11メモリアル交流館 交流係 田澤 紘子 氏

受講者振り返りシートから

- ・ 広報紙について話された際は、「告知のみでなく、公民館に足を運ぶことができない方々にも伝わるような紙面づくりに気を付けている」ということが、はっとしたところであり、すぐにでも取り入れようと思った。
- ・ 我々社会教育に携わるものは、地域を認め、気付きを促し、自己肯定感を高めていくことが、まず初めのゴールなのかもしれない。自己肯定感が高まれば、自ら価値を広げたり、深めたり、新しい価値を構築したりするためにアクションを起こすことができるはずである。そのアクションを支えるのも私の大切な仕事。「認める」「支える」を大切にして、「自分が好き」「地域が好き」と笑顔で言える人をどんどん増やしていきたい。
- ・ 公民館やNPO団体の皆さんが、その時・その場・その人のニーズを住民の方から肌で感じ、共に考え、事業を進めている様子を聞くことができ、自分の仕事もそうでなくてはならないと改めて感じた。人と人がつながることは大事なことであるが、それぞれの地域において難しいことも少なくない。つなげようと思わず、まずは自分を知ってもらうことを大切に、そこから広がっていければと思う。
- ・ 課題が多いとされる「指定管理による公民館運営」が「地域に愛され、慕われ、職員も生きがいを持って職務に専念できる未来につながる公民館」になるよう、「指定管理による公民館運営」についての情報収集や交流を図ることができるホームページの立ち上げなどを行いながら、時に真剣に、時に楽しく話し合いができる時間や環境（場所）をつくりたいと思っている。
- ・ 社会教育に携わり10年になるが、改めて「社会教育」を問うよい機会となった。特に、地域ニーズを捉え、まとめ、それを地域に還元することの大切さを知った。
- ・ 地域に暮らす人々の声に耳を傾けて、地域の人と共に、地域の人と一緒に育っていけるような取組を進めていきたい。「パートナー」という立ち位置が大切だと思った。「聞く力・聴く力」を身につけようと思う。



- ・ 「社会教育施設だからこうあるべきだ。」という公民館のイメージを考え直すきっかけとなった。人と人のつながり、コミュニケーションを大切に、気軽に公民館を利用してもらおう工夫をしていきたい。また、地域によって様々な事例があるが、自分の地域をよく知った上で、地域の特色を生かした事業を展開していきたい。
- ・ 主体は地域、という立ち位置を意識しながら事業を行っていきたい。
- ・ 社会教育とは、共に学び合い、豊かな人生を送ること。職員も学ぶ姿勢をもち、一緒に楽しむこと。講座単体で完結するのではなく、一緒に講座をつくりあげるプロセスも学びの一部で、講師を呼ぶだけが講座ではない。講座を通じて人がつながり、生きがいを見つけ、自信をつけてもらえるようになってほしい。そして、まちづくりにつなげたい。そのために自分自身も楽しみ、魅力的な人間となる。
- ・ 勤務地が地元ではないことを逆に強みにして、地域住民の皆さんに教えてもらうスタイルで、丁寧に話を聞きたいと思った。地域住民の皆さんとつくる地元食の講座をぜひやってみたいと思った。
- ・ 本日の研修を終えて、互いに話しやすい場をつくり、行政が地域の人と交ざり、地域を活性化させたいという気持ちをもって話し合いに臨む必要があると思った。
- ・ 午後の事例発表では、どちらも震災により被災地域となった地区での活動事例であったが、地域それぞれの実情、震災前の風土、そこに暮らす人々に寄り添い、内在する魅力を活かした地域づくりに懸命に取り組む姿の発表に感動を覚えた。まさに社会教育・生涯学習の理想像の一例を聞くことができた貴重な機会であったと思う。
- ・ どの自治体の事例からも、地域の方々とのつながり方や地域住民の力の引き出し方など、大変勉強になることが多かった。また、シンポジストの皆さんの発表力、発信力のすばらしさに感銘を受けた。社会教育においても、このような発信する力は欠かせないと思った。
- ・ 日々社会教育にかかわっている方々と共に学び、多くのお話ができたと、大変うれしく思っている。これまでの取組を振り返るよい機会となった。
- ・ 石本さんから、女性が意識決定の場に出る前に必要なことは、「自分の意見を人前でみんなに伝えるように話すこと」「自分の意見をまとめること」であるという話があった。これからのまちづくりには、子ども・女性の視点が大切だと言われている。女性が積極的にまちづくりに参画するためにも、これから力をつけていくことを意識しながら事業を進めていきたい。
- ・ それぞれの「暮らし」「生活」を見つめ直すことから学びが生まれ、そこから地域がつくられていくのだと再確認し、その考え方で仕事を進めていくことについての確信をもつことができた。
- ・ 自分たちの中であつたり、とても身近なところにある課題であつたり、皆が共感できることがあつて、実はそれがとても大切なことなのだと思つて改めた。
- ・ 公民館が社会教育施設として地域の拠点となることについて、社会教育施設の枠組みの外で活動されている事例を聞いて、その枠組みではもはや限界なのか、社会教育施設としての公民館の存在意義とは、ということについて自分の中で改めて考えてみたいと思った。
- ・ 改めて社会教育の面白さを理解することができた。本日のグループワークの中で、社会教育とは「人がよりよく生きるための教育」という話が出た。これを踏まえ、日々の業務においても、「人の生活が豊かになるための企画（事業）」であると常に意識しながら取り組んでいきたい。
- ・ 自分自身の課題として、ファシリテート能力の向上が挙げられる。地域住民の思いを引き出すコーチングや自ら事業を立ち上げることができるよう仕掛けていくための修行が必要である。また、手段にとらわれすぎるあまり、本来の目的を見失う傾向にもある。どのような人、地域、コミュニティに育ってほしいのか、という目標をできるだけ具体的にイメージして、担当者と学習者で共有する必要性も強く感じる。
- ・ 震災後、多くの支援団体が地域コミュニティの復活のために様々な活動をされている。課題として、それぞれの団体がどのような活動をしているのかを知り、行政に何を期待しているのか、何ができるかを把握する必要があると強く感じた。
- ・ ジュニア・リーダー活動を担当しているが、次世代の地域を担う人材育成につなげていきたいと考えている。若い世代が積極的に地域にかかわるきっかけづくりやリーダーとして活躍できる場づくりについて、今後考えていきたい。
- ・ 様々な事業で出会った方には、開催する学びの場への参加について声がけし、多くの方に参加していただいている。そこでは意識して、参加者のもつ経験を生かすことができようとしている。

